

令和7年度川口賞報告書

報告者：柴田ゆき野（北海道大学・大学院理学研究院）

参加学会：Gordon research conference: A Systems View on Behavior, Genes, Neurons and Environment

開催地：Lucca, Italy

日程：2025年6月29日～7月4日

発表数：口頭発表36件、ポスター発表113件、参加者175名

参加報告

ゴードン会議（Gordon Research Conference; GRC）は1931年から続く歴史のある国際研究会議であり、年間を通しておよそ400にのぼる科学の様々な分野・テーマ毎に世界各地で開催されています。各会議の参加者の上限は200名で、規模としては大きくありませんが、1週間にわたり合宿形式で行われること、および口頭発表セッションの同時並行がなくすべての参加者が同じ口頭発表と一緒に聴講する形式が一貫しており、大規模な国際学会では経験できないような参加者同士の密なコミュニケーションがありました。私が参加したのは動物行動の神経・遺伝的メカニズムに関する合宿でしたが、研究発表の全体的な傾向としては、「モデル動物から非モデル動物へ」、「実験室での行動から自然環境下での行動へ」という動きが確実に進んでいることが感じられ、これまではモデル動物に限られてきた精緻な神経科学研究を非モデル種および種間多様性へと拡張して行動の神経メカニズムを解明する技術が確立しつつある状況が見て取れました。

今回は初めてのGRC参加でしたが、大きな国際学会ではなかなか言葉を交わすこともないような著名な研究者と毎日のように食事を共にするチャンスがあり、その人柄や哲学も含めて知り合いになることができました。口頭発表者と話す中でも研究内容の質問にとどまらず、これまでの半生で何を思い、どのような転機を経て現在の研究をするに至ったのかといったことまで聞くことができました。また、自身と年齢・キャリアが近いポスドクや博士学生とは、今後どうしていきたいかについて悩みや情報交換も含めてひとしきり語り合い、親交を深めました。このように、様々なキャリアおよびライフステージにある研究者たちの生き様が垣間見え、こうした経験は特に若手研究者にとって非常に価値あるものだと思います。しかしながら、少なくとも私の回りではGRCを知っているまたは参加したことがある日本の若手が少ないように思うので、留学に興味がある他の学生・ポスドクにはぜひ勧めたいと思います。研究留学を検討している私にとって、今回得られた経験はまさに今必要なものであり、帰国後は研究留学がはるかに現実味をもち、背中を押される思いです。このような貴重な機会をご支援いただきましたこと、故川口四郎先生並びに日本動物学会関係者各位に改めて心より深く感謝申し上げます。